

# 新規就農システムと酪農村の維持

浜中町農業協同組合

戦後一貫して日本の農家戸数は減少してきた。なかでも、北海道の農村は、兼業機会が少ないため離農＝挙家離農（一家全員が村を離れる）を余儀なくされ、農村人口の劇的な減少を招いてきた。なかでも酪農村は、給餌や搾乳にかかる毎日の作業が重労働なため、高齢化が離農に直結しやすい。

こうしたことを背景に、北海道では1982年に新規就農を支援する「農場リース事業制度」が創設され、制度を活用した新規就農者対策への取り組みが早くから進んだ。

全国に先駆けて研修農場整備による独自の新規就農者育成システムを築き、最近では取引企業の出資などによるメガファーム(株)酪農王国を整備するなど、新規法人参入支援を促す地域酪農業の維持を意図する画期的なシステムを築き上げた浜中町農業協同組合の石橋榮紀組合長にお話をうかがいました。



浜中町農業協同組合  
組合長 石橋榮紀さん

## 生乳の計画減産と続出する離農に危機感を抱く

私が農協へ入って間もなく、生乳生産の伸びが需要の伸びを大幅に上回る時代がやってきました。1979年には第1回目の計画生産が行なわれました。生乳の1割もの減産が実施されたのです。その頃から離農者が急激に増えていきました。減産計画のたびに離農者が続出しました。

1981年に専務理事になった頃でした。農協に入った当時400戸近くいた酪農家が10年も経たないうちに100戸近く離農者が出て、既に300戸を切っていました。このままでいったら、将来、酪農家がいなくなるという危機感を持ち、何がなんでも新規就農者を入れなければならないという思いを強めていきました。

82年に酪農業への新規就農を支援する北海道農業開発公社の「農場リース事業制度」ができました。私は、二度にわたって農協の理事会でこの制度を活用して新規参入者を迎え入れるべきだと提案しましたが、「この馬の骨かわからない者を入れるわけにはいかない」と役員全員の反対に遭いました。根底では、離農跡地は既存農家の大規模化のチャンスだと捉える機運がまだ続いていたのです。当時、浜中町では10年計画で国営総合農地開発事業が実施されていて、7,000haの草地を約2倍の15,000haにまで造成している最中でした。

私は2年目も同じ提案をしてなんとか、83年に新規参入者を迎え入れることができました。十勝の農家研修に入っていた若者に第1号で来てもらいましたが、優秀でまじめな若者で、1年目から着実な経営成果を上げて100万円もの税金を納めました。それからは新規参入者を入れることに反対する者はいなくなりました。

## 自前の農場で新規就農者を育てる

農場リース事業制度ができて10年目近くになると、皮肉にもそのおかげで新規就農の候補者となっていた農家研修生が全道に就農してしまい、新たに就農できる人がいなくなりました。

乳価は低迷時代に突入し、離農するも待たなし、新規就農させるも待たなしの中です。こうなったら、新規就農者を自前で育てるしかないと考え、自前で新規就農者を育てるための研修農場制度新設の検討が始まりました。

「研修の間にも生活費は要るだろう」「いくらかかる」「独身者じゃ駄目だ。夫婦で来てもらうのが条件だ」「給料はどこから捻出するのか」「研修の実を上げるためのプログラムはどうする」「町にも出資をお願いしよう」等々かんかんがくがくの議論の末、91年に農協が主導する研修農場を中核とした新規就農システムをつくりあげました。

農協が出資して研修牧場を整備する。農協職員が出向して研修牧場を管理し、まったく農作業体験のない新規参入希望者でも酪農のプロフェッショナルになれる実践プログラムを用意し、約3年以内に新規就農を約束するというものです。

研修期間中は雇用する形で生活費25万円と住宅を貸与し、生活の不安をなくすことによって都会の若者夫婦の関心を引き寄せました。

町にも、研修農場の整備にかかる費用の半分を負担してもらいました。さらに、町は新規就農者誘致条例を整備して、農場リース制度の5年間にわたるリース料の半額助成や固定資産税の助成などの支援をしてくれました。

### 新規就農者を定着させるために

研修農場による新規就農システムは、着実に成果を上げました。農場リース制度が始まって2009年までの27年間で27人も新規就農者が入村しました。そのうち研修牧場を卒業した者は2008年までに13人にのぼり、新規就農者全体の6割にもなりました。その間、新規就農者がリタイアしたのは、健康不良で離農せざるを得なかった1人だけです。新規就農者は確実に定着し、2007年には酪農家194戸の14%を占めるまでになっていました。

浜中町には平成3年に新規参入促進協議会が組織さ

れていて、何か困ったことがあったら、農協、町、農業改良普及センター、農業委員会、共済組合などになんでも相談できる体制が整っています。

特に強調しておきたいのは、離農農家の意志が明確になった段階で、まず地域の農家にその後の対策について、離農跡地を既存農家で引き受けて規模拡大で行くのか、新規参入者を迎え入れるのかを相談するということです。そして、「このまま農家が減っていくと集落の維持ができなくなるので、新規参入者に来てもらいたい」という合意に達したら、新規参入者に入ってもらいます。新規参入の準備段階でその地域で歓迎会も実施します。こうした細かいフォローをすることで、受け入れる者と、入ってくる者との対等の関係が醸成され、入ってくる者もなんら負い目なく参入できるのです。

### コミュニティ崩壊の危機感に「待たなし」の決意表明

2007年に浜中町の農家戸数は200戸を切り、198戸になりました。農場リース事業を活用した新規参入は補助事業の予算的な制限があって、原則として1農協当たり1戸でしたので、年間3～4戸の離農をカバーすることにはなりませんでした。

いよいよ地域コミュニティが維持できなくなるところが出てくるかもしれないという思いが頭から離れませんでした。例えば、ある部落では10戸あった実行組合（町内会）が8戸になり、6戸になりと減少していき冠婚葬祭を取り仕切ってきた実行組合がこれ以上離農者が出たら、集落が持たないと悲鳴をあげるところも出てきました。まさに、限界集落です。

2009年の第7次浜中町農業協同組合中期計画は、「浜中酪農の維持と農村社会の発展」というタイトルにしました。「維持」という言葉でわれわれの悲壮感を示しました。2007年末にすでに194戸になった農家が2013年末には180戸になると計画しました。6年間で14戸の離農を予測、5～6戸が就農する計画を立てました。計画というより、「待たなし」の決意表明です。

### 時代に即応した新規就農対策を追加

農場リース事業制度では原則1農協当たり年間1戸しか認められませんから、これまでの研修牧場に、農協が自らの持ち出しで分場を用意し、補修整備して新規就農者に引き継ごうと考えました。研修牧場の「のれん分け」です。農協の持ち出しが大きくならないように、離農跡地の条件が良く、補修にあまりお金がかからないものに限られてきますが、これまでに3地区で分場を用意し、リース事業制度によらないのれん分けの形で新規参入が実現しました。

さらに、2009年には農地法改正で企業の新規参入要件が緩和されたことを受け、法人経営の農場設立を促進するための酪農経営の企業人養成システムとしてメガファーム「酪農王国」を設立しました。乳業メーカー、飼料会社や輸送会社、畜舎の建設会社など、付き合いのある企業に声をかけ出資してもらい、農協所有の育成牧場を再利用して酪農経営管理者を養成できる酪農業を展開しています。

農協からも2人の職員が出向して管理し、従業員が4人雇用され、将来、酪農業に法人参入したい建設業などからの3人の派遣者が経営マネジメントの研修に励んでいます。今年、大規模経営の離農があったので、研修していた派遣者の親会社がその離農跡地を引き受けて農業生産法人として新規参入しました。このように酪農王国は、新規に法人として参入したい企業に対する酪農経営管理者養成を通して橋渡しを行うことに重点を置いています。

### 世界標準「メイド・イン・ハマナカ」づくり

TPP交渉の影響が懸念されますが、長期的には関税障壁が低くなっても対応できる方向で準備しておかなければなりません。浜中町は乳業メーカー準大手のタカナシ乳業(株)を誘致し、ハーゲンダッツのアイスクリームの原料を提供してきました。ハーゲンダッツはアメリカ、フランス、日本に生産拠点があり、大規模な草地で放牧された浜中町の乳牛は健康的で、生産される生乳は最もおいしいのです。飲んでみると一口で

わかります。農協は生乳の品質を向上させるための検査施設「酪農技術センター」を1981年に設立し、牛の飼育管理から土、草などの生産要素に至るまでトレーサビリティ<sup>※1</sup>を確立してきました。メイド・イン・ハマナカの生乳が世界標準であることは、関係者なら誰しもが理解しているところです。現在、東南アジアのハーゲンダッツのアイスクリームはフランス産の生乳が使用されていますが、TPP交渉などにより、関税障壁が低くなればなるほど、メイド・イン・ハマナカの品質の高い生乳が東南アジアなどへ向けて利用されると確信しています。



新規就農者の菅田実津留さん

やはり、給料がきちんと出るというのは、安心できます。新規就農してから5年間のリース料の半額補助などは、他の町と比較して手厚いと思っています。農場での研修期間中も、先輩が教えてく

れるし、自分に後輩ができれば後輩に教え、みんなで助け合っていてやっています。

サラリーマンは退社してもいろいろ仕事の悩みなどがあるようですが、逆に酪農は自分がやるべきことをやっていれば後は自由です。生き物を飼っているので365日働いて大変だというイメージがありますが、ヘルパーを雇って家族でも、夫婦で交代で休むこともできます。自由な時間は工夫すればできます。

研修牧場ではフリーストール<sup>※2</sup>でしたが、実際に就農した牧場はつなぎ飼いで、最初は少し戸惑いましたが、わからないことは回りの人たちが気さくに教えてくれますし、親切な人が多い気がします。

年収は4,000万円くらいですが、経費も結構かかります。5年目からはリースしていたものを買い取らなくてはなりません。5,000万円くらいの借金になりますが、お金の返済ばかり考えて働き過ぎないようにしています。お金だけのために就農したわけではありません。現在、草地60haで50頭の搾乳をしています。トラクターを現金で買えればかっこいいと思っていますので、70頭にしたいと思っています。

来てよかったと思っています。特に辛いことや悩みはありません。6歳の息子がいますが、息子と将来一緒に酪農の仕事ができればいいなと思っています。

やる気さえあればOKです。自分たちは大学を卒業したばかりで貯金もなかったのですが、おいでと言われて、ここまでやってこられています。ただ、乳牛は経済動物でペットではありません。経済動物としての感謝はありますが、あまりペット感覚が強すぎると駄目かなと感じたことはあります。

TPP交渉なども、私たちがどうこうできる問題でもないし、流れに任せるしかない、それほど気にしていないのが本当のところでは。

※1 トレーサビリティ (traceability)  
追跡可能性。製品の流通経路、生産から加工、流通・販売・廃棄までの過程を記録し、追跡可能な状態をいう。

※2 フリーストール (free stall)  
1頭ずつに仕切られている囲い(ストール)に牛をつながずに、どのストールでも自由に入出できるスペースを持った牛舎の形態。